

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## アルジュリア女性による90年代フランス語表現文学

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武内, 旬子, Takeuchi, Junko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1450">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1450</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# アルジェリア女性による90年代 フランス語表現文学

武内 旬子

## 1. 危機と女のエクリチュール

アルジェリアが「戦争と呼ばれることのない戦争<sup>1</sup>」を生きようになってすでに10年が過ぎようとしている。宣戦布告も、テレビ中継もないこの「戦争」は、10万ともそれ以上とも言われる死者を出し、20世紀末のアルジェリア社会を引き裂きながら、いまだ完全には終結していない。悲劇的な10年が今後どのような未来を生み出すことになるのか、確定的なことなどまだ誰にも言えないとしても、この時代がアルジェリア女性によるフランス語表現文学の急展開を見たことは事実である。主に90年代後半に、フランスの一般書店にも並べられるようになったこれらのテキストは、どのような特質をもっているのだろうか。危機が生み出した女たちのエクリチュールをどのように読むことが可能だろうか。

90年代にアルジェリア女性によるフランス語表現の出版物が急増したことの背景には、書く側の事情と出版する側の事情との相互作用が存在する。書く側、すなわち著者の女性たちにとって書くことは、一言でいえば「生きぬくための手段」と化した感がある。経済的な問題ではなく、狂気に陥らず、死の恐怖に打ち勝って生きのびるための方策として、彼女たちは書くことを

---

1 Assia Djebar, *Le blanc de l'Algérie*, Albin Michel, 1995, p.271.

選ぶ。

88年10月の「暴動」以来、長らく国家の統制下におかれてきた報道や表現にある程度の自由が認められ、特にフランス語表現メディアは一時期隆盛を見る。しかし、同時に始まった政治的・社会的危機は、表現の自由にも順調に発展するひまを与えなかった。また、すでに70年代初頭に始まるアラブ語化政策は、90年代にはますます強化され、この間、アルジェリアにおいて、一部の新聞雑誌以外のフランス語による出版物は多くはない。本論が取り上げる30あまりの作品もすべてフランスで出版されている。こうした状況にもかかわらず、これらの女性たちは「他者の」言語フランス語で書き、出版したのである。その事実は何をもたらすのだろうか。

ジャーナリスティックなものから、社会学的・政治学的な研究書、また男性の書き手による文学テキストも含め、今フランスにおいて、アルジェリア関連出版物は目白押しである。シャルル・ボンとファリーダ・ブアリの編集による90年代アルジェリア文学を扱った論文集は<sup>2</sup>、巻末の40ページに及ぶ文献一覧に、1990年以降の700点を超えるアルジェリア関連フランス語出版物を掲載している。<sup>3</sup>(ただしこれには、アルジェリア人以外の著者のものも含まれる。また圧倒的多数が男性の著者である。)これはもちろん、歴史的経緯からしても、移民の多い現代の社会的現実からしても、アルジェリアの動向に敏感な(だからといって必ずしも理解が伴うわけではないにせよ)フランスの注意が、女性の文学に限らず、この間の激動するアルジェリアに向かわざるを得なかったことの反映でもある。その中で本論の取り上げる90年代

---

2 Sous la direction de Charles Bonn et Farida Boualit, *Paysages littéraires algériens des années 90: Témoigner d'une tragédie?*, L'Harmattan, 1999.

3 なお、単行本のみならず、上記 Bonn の論集でもそれについて一編がさかれているが、1996年5月にパリで創刊された雑誌 *Algérie Littérature/Action* (Edition Marsa 以下 ALA と記す。)の果たす役割も大きい。2000年4月の時点で36号を数え(2号合併が多いので実際には22冊、及び特別号1冊)、原則として1冊につき書き下ろしの作品(中長編)一つを掲載するという、なかば単行本の性格も備えたユニークな雑誌である。アルジェリア人によるフランス語作品がほとんどだが、アラブ語からの翻訳、フランス人によるものも若干ある。本論の分析対象テキストのうち4編はこの雑誌に掲載されたものである。そのうち2編は、雑誌掲載作品から5編を選んで単独出版物としたものにも収められている。

後半にほぼ30あまりの出版物というのは、絶対数にすれば、出版物全体のごく一部にすぎない。しかし、同じ分野のそれ以前の状況（名の知られたアルジェリア女性作家といえばほとんどアジア・ジェバルただ一人）に比べれば明らかに急増している。また、幾つかは Grasset や Albin Michel, Plon といった、第三世界専門でもない「一般」の出版社から出ているという事実も注目に値する。要するに、90年代、この分野のテキストはフランスの市場で可視化されるようになったと言えるのだ。

稿末に一覧を掲げるテキストの選択について述べておきたい。アルジェリア出身の女性によって書かれ、90年代危機と何らかの関わりがあると判断されるものを選んだ。形式については後に詳しく検討するが、広い意味での文学、フィクションとエッセイ的なものの両方を含み、学術的・社会的な著述などは除いた。90年代初頭に出版されたものにはそれ以前に執筆され直接この時代との関連が薄いものが多い。この意味で90年代のテキストと呼べるのは、ほぼ、95年以降に出版されたものである（本論で考察対象となるテキスト中最も早い出版は93年。以下、95年5作、96年5作、97年8作、98年6作、99年1作。）著者のアルジェリア出身という定義もいささか曖昧であるが、厳密な意味での国籍ではなく、文化的・家族的背景、また教育の場所などから、アルジェリア社会への帰属が他に比べて優勢と考えられるものとした。従って、フランスで生まれるか幼少時に移民してフランスで教育を受け、生活や活動の基盤がフランスにある書き手は含まれない。ただし、取り上げる著者の半数以上は、90年代の亡命者も含めて現在フランスを中心とした外国に居住している。

なお本論は、以上の条件にあてはまるテキスト全てを網羅できたわけではもちろんなく、考察対象は26作、および参考として対談・聞き書きが3作である。しかし、女性の書き手によるこの時代のフランス語表現文学を考えるには十分な数であり、またこの数は、90年代後半に関する限り、この分野の大多数を視野に入れることを可能にするものであると判断した。

## 2. 90年代を書く

この一連のテキストに共通するのは、何よりもその「社会的」性格である。ボンは80年代にはすでにマグレブ文学に「現実の回帰」が認められると述べている<sup>4</sup>。そこでは70年代から80年代前半にかけての、主にマグレブの男性作家たちによる「ポストモダン」的文学実践との対比で、現実の、あるいは社会的テーマの復活が論じられている。女性作家の場合、この図式をそのままあてはめるのは難しい。この時期に女性作家が存在しなかったわけではないが、テーマよりも形式上の秩序転覆を重視する作家としてボンが同論文で挙げているこの時期の、ブージェドラ、ファレス、ハティビ などに対応する例を挙げるのは困難である。唯一の例外は多様な形式のエクリチュールを実践しているジェバルである。本論の分析対象の圧倒的多数は、同時代のアルジェリアの現実を中心テーマとして、社会的・政治的問題を直接とりあげている。本章ではまず、女性の書き手たちが共通して語っている主題を考察したい。

最も明示的かつ頻繁に現れるのは、当然のことながら90年代アルジェリア社会を襲う暴力への批判である。現実に殺された多くの人々の実名（特に知識人のそれ）も頻繁に引用される。イスラミスト<sup>5</sup>の蛮行ばかりでなく、軍・政府による暴力的弾圧も同様に告発の対象となる。それも理論的、学問的であるよりは「個人」が日々刻々感じる恐怖から発する批判が特徴的であり、語り手の視点は基本的に「犠牲者」のそれである。たとえばジャーナリストを語り手とするニナ・ハヤット（著者自身もジャーナリスト）の『白いアルジェに夜の帳が降りる』<sup>6</sup>などでは、一部、語り手の書く記事や議論という形でジャーナリスティックな論調もみられるが、あくまでも、死の脅迫を受け

4 Bon, "paysages littéraires algériens des années 90 et post-modernisme littéraire maghrébin", in Bonn et Boualit, op. cit., p.10.

5 イスラムによる改革を主張する人々を指して幾つかの用語が用いられるが、"islamiste" が最も多い。この他、"intégriste" という語が現れることもあるが少数である。

6 Nina Hayat, *La nuit tombe sur Alger la Blanche*, Editions Tirésias, 1995.

ている語り手「私」の心情の表現が中心を占める。マリカ・ブースフの『追いつめられて生きる』<sup>7</sup>も著者はジャーナリストであるが、具体的な個人の恐怖を綴る章と、ジャーナリストとしての分析や「客観的」批判の章が、完全にはないまでも区別された上で共存している。なおハヤットは、暴力を生む対立の構図に、権力側・イスラミスト側という2極に加え、個人的恨みの精算という側面を指摘している<sup>8</sup>。批判の視点や形式の問題は、他の問題とも密接に関わっており、それらを考える際にも再論することになる。

90年代を批判としようとするこれらのテキストが揃ってとりあげるもう一つの主題は90年代以前をも含むアルジェリア社会の再検討である。危機は突然起こったのではない。88年10月の「暴動」や92年12月のFIS<sup>9</sup>の圧勝に至る原因を探ろうとすれば、必然的に時代を遡らねばならないが、それはしばしば苦痛を伴った作業でもある。すでに、95年に出版された5作の内4作において、進行中の暴力への批判と同時に、歴史の見直し、欺瞞的自己像直視の試みが認められる。たしかに同じテキストに一部、古き良き時代への回想も含まれている。ハヤットやマリカ・モケデムは70年代初頭までのアルジェヤオランでの学生生活の自由や男女共生の有様を描いている。特にオランという都市についてはジェバールとモケデムの二人がアルジェリアの中でも特に開放的で自由な町として、偏狭な宗教勢力に支配される前の姿を想起している<sup>10</sup>。が、それも同じ時代の裏面への批判的まなざしを曇らせるものではない。フェリエル・アシマの『アルジェの一人の女』<sup>11</sup>は全体が苦い思いに浸されて

---

7 Malika Boussouf, *Vivre traquée*, Calmann Lévy, 1995.

8 Hayat, op. cit., p.56.

9 イスラム救国戦線。1989年の複数政党制移行後に合法化されたイスラム主義政党。90年6月の地方選挙での勝利に続き91年12月の国政選挙の第一次投票でも圧勝。翌年1月に行われるはずの第二次投票が中止され、それ以降政治的・社会的混乱が本格化する。同年3月に非合法化される。イスラム主義勢力の代表としてしばしば引き合いに出されるが、この勢力も一枚岩ではなく、テロ活動を行う武装組織も数多く、FISがそれらを一貫してコントロールしているわけではない。

10 c. f. Assia Djebar, *Oran, langue morte*, Actes Sud, 1997 et Malika Mokeddem, *Des rêves et des assassins*, Grasset, 1995.

11 Fériel Assima, *Une femme à Alger. Chronique du désastre*, Arléa, 1995.

いる。「私たちは単純に自分たちは自由に生きていたと思いこんできた」<sup>12</sup>のだし、「私たちは全てにおいて模範的であると宣言され」<sup>13</sup>てきたからこそよけいに、その欺瞞が明らかにされる時代に幻滅は著しい。「あの時代アルジェリアは第三世界の灯台だった」<sup>14</sup>というラティファ・ベン・マンスールの言葉は、独立後のアルジェリアが自らに与えようとしたイメージとその失墜を如実に示す。しかし、幻滅以上に深刻なのは、歴史の偽造の発見である。アシマは「没収され、皆に禁じられてしまった歴史」<sup>15</sup>、「いまだ禁じられているこの歴史が、いかなる幸福も不可能にする」<sup>16</sup>と述べているが、それに関する具体的な記述はなく、まさに禁じられたものをめぐって苦渋に満ちたエクリチュールが渦を巻く。それに対しジェバルの『アルジェリアの白』<sup>17</sup>はこの問題に直面する方法そのものを探ろうとする試みである。この複雑なテキストについては後述するが、そこで問題とされているのは、独立戦争時の内部対立と権力闘争、それに伴う暗殺、粛清といった激しい暴力の実態である。そこから、それらをタブーとして沈黙の闇に沈めることで成立した独立後の権力の正当性への疑問が呈され、その権力の抑圧的性格や腐敗が、イスラミストの暴力をも含めた政治的・社会的危機を準備した最大の原因として告発される。95年の作品はほとんど、FLNがFISを生み出したという見方を共有している。

しかし批判的視線にさらされるのは権力のみではない。過酷な独立戦争を闘い、植民地支配をはねのけた英雄的人民がつくっているはずの社会自体もテロ蔓延の責任の一端を担っているのではないか、という問いを自らに課す時、語り手（あるいは書き手）はもはや「犠牲者」の位置にのみとどまってはられない。アシマの『アルジェの一人の女』では「私たちは皆共犯者だ」

12 *ibid.*, p.18.

13 *ibid.*, p.152.

14 Latifa Ben Mansour, *La prière de la peur*, Editions de la Différence, 1997.

15 Assima, *op. cit.*, p.81.

16 *ibid.*, p.35.

17 Djebar, *Le blanc de l'Algérie*, Albin Michel, 1995.

という言葉が執拗に繰り返される。<sup>18</sup>権力批判の舌鋒鋭いブースフも、独立戦争の元戦士の間にすら横行する腐敗を、語り手の母の苦い体験として語っている。<sup>19</sup>また金銭や特権をめぐる腐敗と並んで怠慢や無責任も（アルジェの町のごみだらけの荒廃ぶりは、ほとんどのテキストにも現れる）、危機の結果や社会の荒廃の表れという以上に、むしろ危機を生み出すことになったこの社会の弱点として語られているように思われる。さらに、家族・近隣の連帯という幻想にも容赦なく亀裂が生じていく。アシマ、ハヤット、サブリーナ・ヘルビッシュなど多くが描く人間関係の崩壊は、直接の暴力と同じほどに人々を蝕むものとして捉えられている。

こうした、社会の持つ様々な問題のなかでも、我々のテキストが共通してとりあげるものがあるとしたらそれは女の状況である。<sup>20</sup>アルジェリアの女性による言説のうちフランス語表現文学においては、イスラミズム台頭以前から、この社会が持つ女に対する抑圧的性格が繰り返し俎上に乗せられ、90年代以前から書いているジェバル、ハワ・ジャバリ、ハフサ・ジナイークディルなどもくりかえしとりあげている。本論のテキスト群は、このテーマを、90年代特有の展開とそれ以前から一貫して存在する問題という双方の視点から描き、女のありかたを通してアルジェリア社会の現状を見据えようとする。

テロの標的とされた語り手もしくは主要登場人物は、男性の書き手による同時代の作品にも登場するが、女性の書き手による場合、本人と同時にパートナー（夫もしくは恋人）が、あるいはパートナーのみが標的となる場合が多いのが特徴である。たとえばハヤットでは夫婦双方が脅迫を受け、ガニア・ハマドゥ【永遠の最初の日】<sup>20</sup>、ヘルビッシュ【曇った眼】<sup>21</sup>では夫や恋人が犠牲になる。ヘルビッシュではのちに妻の方も凶弾に倒れる。ベイの短編集<sup>22</sup>に

18 c. f., Assima, op. cit., pp.9, 18, 27, 142, 180など多数。

19 Boussof, op. cit., p.34. 戦死者の遺族年金を申請しようとした母に、夫の経歴を証明できる立場にいる戦友が見返りに金銭を要求するエピソードなど。

20 Ghania Hammadou, *Le premier jour de l'éternité*, ALA, No.12-13, 1997.

21 Sabrina Kherbiche, *Les yeux ternes*, L'Harmattan, 1995.

22 Majssa Bey, *Nouvelles d'Algérie*, Grasset, 1998.

は、死の脅迫にさらされている夫の逃避行に同行することを拒み、夫の死後そのことに対して激しい罪悪感に襲われる妻も描かれる。上に述べたすべてのテキストにおいて女は苦痛に満ちた喪の作業を強いられるが、自らが脅迫の対象となる場合とは別種の苦悩がそこには読みとれる。もちろん、パートナーとは無関係に女が対象になるテロも少なくない。ジェバールでは『アルジェリアの白』と並んで『オラン、死んだ言葉』の中にも首を切り落とされる女性教師の物語がある。ジャバリ『赤い粘土』<sup>23</sup>やアシマでは女性医師が脅迫や暴力の犠牲となる。ブースフは脅迫にさらされるジャーナリストの女性を語り手として日々の恐怖と追いつめられていく心理を克明に語る。こうした標的としての女性に共通するのは、フランス語話者という特性である。さらに彼女らの多くはジャーナリスト、教師、医師などの職業につき、伝統的な女性の生き方とは異なる道を選んでいる。フランス語話者であることと「西洋的に解放された」女性であることはしばしば重なり（アルジェリアにおける言語問題については後述）、彼女たちは、アルジェリア人として、さらにはあるべきイスラム女性としてイスラミストの想定する規範からの二重の逸脱者として憎しみの対象となる。アシマは、イスラミストのすすめるヴェールを付けた女性が町を歩き、ヨーロッパ風の服装の女性が家に閉じこもる奇妙な逆転現象を皮肉をこめて指摘している。<sup>24</sup>ただし、90年代の暴力はこうしたエリート女性にのみ向けられるのではない。我々のテキストの多くが語るのは、ヴェールをかぶることを拒否した女子高校生が喉を掻き切られた事件であり、山中にたてこもる武装イスラミストによる少女たちの拉致、強姦、殺害である。<sup>25</sup>さらに無差別テロの被害者には女も多く含まれる。

90年代のこうした状況を語るテキストは、ほとんど常に、ここへ至るまでにすでに十分女に抑圧的であった社会への批判的言説を伴っている。道路を

23 Hawa Djabali, *Glaise rouge*, ALA No.26, 1998.

24 c. f. Assima, *op. cit.*, p.66.

25 こうした事件は実際に起こっており、フランスなどのマスコミによっても報道されている。この点については4章で検討する。

はじめとする公的空間が女に対して敵対的である様を、モケデム（『禁じられた女』<sup>26</sup>）やハヤットは描き、ファティア、ジナイークディルは、すでに70、80年代から警察権力によるカップルへの弾圧や大学キャンパスでの女子学生に対する心理的攻撃の存在を示唆している。ファティアは『アルジェリア動乱の中の一女性によるクロニック』<sup>27</sup>の中で、独立後の無理な工業化政策のせいで大挙して都市部に押し寄せざるを得なくなった田舎の人々が古い風習を都市部の開かれた女たちにも押しつけたことに原因があると、農村部出身者へのいささかの軽蔑を含んだ分析をしている<sup>28</sup>。語り手は、彼女のような都会の知識人女性と、伝統的な生活様式の女とは、同時代に生きていても「数世紀の歴史によって隔てられて」おり、自分がそのような女たちに「嫉妬あるいは感嘆の念を引き起こしているのか」<sup>30</sup>と自問している。

しかし、一見「解放された」ように見える女たちの多くが、実際には伝統的価値規範との衝突に日々さらされ、それと闘い、あるいは手なずけたりやりすごしたりしなければならぬ。女たちに強いられた二重生活の例をハヤットはいくつも挙げている<sup>31</sup>。自由な時間を作り出すための嘘、ラマダン期間中食べていないふりをする嘘、喫煙や飲酒を隠す嘘、学校や会社を一步でやすカーフをかぶるのも戦術的嘘の一形態である。こうした二重生活は単なる方便のはずが、実は、現代を生きる女たちの精神的平衡を脅かすのだが、それは同時にアルジェリア社会自体の抱える二重性でもある。ファティアは、独立後のアルジェリアが、一方で普遍的な人権を承認しながら、もう一方で家族法<sup>32</sup>により公に性差別を認めている現実を、心理的に耐え難い矛盾として告

26 Malika Mokeddem, *L'interdite*, Grasset, 1993.

27 Fatiah, *Algérie, Chronique d'une femme dans la tourmente*, Editions de l'aube, 1996.

28 *ibid.*, pp.38-39.

29 *ibid.*, p.64.

30 *ibid.*

31 Hayat, *op. cit.*, pp.98-99.

32 1984年に制定された民法典。婚姻に関して、女性を生涯、後見人を必要とする未成年扱いにする、男性にのみ複数の配偶者を認める、夫は一方的に妻を離縁できるが逆は不可能など、明らかに性差別的内容を含んでいる。

発する<sup>33</sup>。彼女の述べるように「人間は自然に唯一の規範を求める<sup>34</sup>」かどうかは異論の余地があるとしても、こうした矛盾が女の生きる状況をより困難なものにすることは確かであろう。両親を始めとする年長の家族の抑圧以上に、希望に燃えて未来を開こうとした女性たちに打撃となるのは、同世代の男性による裏切りである。モケデム『夢と暗殺者』<sup>35</sup>、マイサ・ベイ『始めに海があった』<sup>36</sup>には、独立後同じ高等教育を受け、学生時代は対等のパートナーとして恋愛関係にあったカップルの男性が、卒業後次々に「伝統的な」女性を妻に選び、「近代的」恋人を捨てていく有様が描かれる。

全体として、社会的圧力に抗する面が語られる傾向が強いとしても、我々のテキストに伝統文化への肯定的まなざしが欠けているわけではない。そしてその伝承はしばしば祖母から孫娘へと一代とんでおこなわれる。ジェバール『オラン、死んだ言葉』に収録された短編「帰還 非帰還」には家族の名誉を守るために娘を殺す母が登場するが、母と娘は直接の対立項となりやすい。それに比べ、祖母と孫娘には適度な距離が保たれるためか、肯定的関係として語られる。ジャバリの『赤い粘土』の中心人物は都市に住む女子大生だが心に問題をかかえ、一時期山村に住む母方の祖母宅に身を寄せる。そこでゆっくりとすすむ癒しの過程が物語りの軸になっていくが、高等教育を受けている娘と字を読まない祖母との間に、素朴な生活の技術や感性の伝授が行われる。これだけであれば、家族内での伝統の継承という「フォークロア」に堕しかねないが、そこに村に住むもう一人の年輩の女性が開口部を付け加える。独身、よそ者、黒人という「他者性」を一身に引き受けるこの人物は、医師として助産婦として、命の誕生を助け人々を癒す。すぐれた庭師でもあってその庭は色彩と生命にあふれているが、それは望ましいアルジェリアの雑多な豊かさをも暗示している。ベン・マンスール『恐怖の折り』の中心的語

33 Fatiah, op. cit., p.20.

34 ibid.

35 Malika Mokeddem, *Des rêves et des assassins*, Grasset, 1997.

36 Maïssa Bey, *Au commencement était la mer*, ALA No.5, 1996.

り手も祖母の庇護のもとにある。これは、古都トレムセンの名家に属する自負に支えられた語り手が書き伝えようとする伝説、歌、ことわざなどが、近代小説の枠組みをししばはみ出す特異なテキストだが、そこでは、語り、書くことは、「文字、言葉、文を梳き、結び、刺繍し、紡ぐ<sup>37</sup>」と幾世代もの女が行ってきた仕事の身振りのメタファーをもって定義される。

「女」と並ぶ我々のテキストの共通項はフランス語という表現手段だが、それ自体がテキストの重要なテーマに他ならない。フランス語の問題が、アルジェリアの社会・文化の多様性の主張と一体になって現れるところに90年代の特性をみることができる。独立以来一貫して公の空間に場を持つことを禁じられてきたベルベル語への言及と対をなすかのように、フランス語使用の擁護が書き込まれているのだ。かつての支配者の言語という事実が隠蔽されるわけではないが、この言葉は、植民者／被植民者という二項対立の一方にのみ必然的に結びつけられる要素ではなく、今やアルジェリア人が自らのものとなしえた何か、植民地支配の痕跡に違いないとしても現在のアルジェリアを作り上げている、いわば身体の一部ですらあるとされる。そしてこれらのフランス語表現文学は、アラブ・イスラム的要素のみに還元されないアルジェリアの多様性の証左として自らを提出しようとする。

無理なアラビア語化への批判は多くのテキストに繰り返し現れるが、とりわけハヤットは『白いアルジェに夜の帳が降りる』において父、語り手、娘の三代の経験を語りつつ批判を展開する。アラビア語が第一言語となることに異議があるわけでは毛頭ない。それは父の世代の悲願でもあった。しかし、ナショナルな言語、そして教育言語となるべきだったのは古典アラブ語ではなく、アルジェリアの人々が日々話しているアルジェリア・アラブ語だったのであり、同時に、フランス語はすでにもっていた地位を保持するべきであると、語り手は主張する。彼女の第一言語はフランス語、夫はカビリー出身でベルベル語を母語とし、中学生の娘は家庭では両親とフランス語で話し、

37 Ben Mansour, op. cit., p.193.

学校では古典アラビア語で教育を受けている。語り手の不満は、彼女からみてきわめて不十分なフランス語教育（外国語として教えられている）のみならず、古典アラビア語による教育が、宗教教育の強化をも意味していることにある。準備不足のまま始まった古典アラビア語による教育を支えるためにエジプト始め中近東諸国から招かれた教師たちが、イスラミズムの種をまいたのだとするハヤットにとって、アルジェリア社会を苦しめているイスラミズムは、何よりも、アルジェリアとは異質の「外来思想」なのである<sup>38</sup>。偏狭な単一原理とはほど遠いアルジェリアの多様性を礼賛する一方でハヤットは、娘の書くあやふやなフランス語を「わけのわからないクレオール<sup>39</sup>」と形容し、また若者たちが、アラビア語の統辞法にアラビア語化されたフランス語の語彙を住み着かせてつくりだすハイブリッドな話し言葉を、軽蔑を込めて描く<sup>40</sup>。生存権を主張できるのはあくまでも、それぞれに正当なフランス語とアルジェリア・アラブ語なのだ。しかし、語り手の思惑とは別に、テキストは、現代アルジェリアの、複雑に変動する言語のダイナミズムを垣間見せてもいないだろうか。ハヤット、モケテムなども用い、アルジェリアの言語問題、教育問題に関する評論などにも頻出する「二言語非識字者（*analphabètes bilingues*）」という用語は、見方を変えれば、政治家や知識人たちの支配や想像力のおよばぬところで、若い世代が、文字通りの多言語状況を自分なりの方法で生きていく現実を指示している。きちんと分類された多様性を求めるこれらの著者たちが嘆くようにそこにあるのは、はたして、否定的な側面のみ、だろうか。

ジェバルの『オラン、死んだ言葉』中の一編「バラバラにされた女」は、コント（物語、説話）と銘打たれ、直接的批判という形はとらない。しかし、短編ながら精密な読みを要請する複雑なこの物語は、アルジェリアの言語問題のはらむ危機と可能性の両方を書く試みの中で最も興味深いものの一つで

38 c. f. Hayat, op. cit., p.33.

39 Hayat, 1995, p.34.

40 *ibid.*, p.36.

ある。詳しい分析は別稿に譲るとして、ここでは提起される問題の概要のみ述べたい。リセのフランス語教師であるアティカという女性を軸に、千夜一夜物語の一編と1994年のアルジェリアを舞台にした物語（原則としてイタリク）とが交錯する。アティカは、自分の授業でハルン・アル・ラシドの時代のバグダッドで夫の誤解と嫉妬から殺された女性の物語を取り上げる。シェラザードの語りがそうであったようにアティカの授業も少しずつ5日間続き生徒たちを議論に巻き込む。そして5日目の終わりに教室に乱入した男たちによって、生徒の目でアティカは殺され、ついで首を切り落とされる。卑猥な話を生徒たちに語ったという罪で。切断され教卓に置かれた頭部はしかし、生徒たちの前で語り続ける。最後の声を聞き届けた少年の問いかけでコントは終わる。千夜一夜の物語は、単に、殺害されるアティカの運命を予告し又告発するのではなく、アティカ自身の「語り変え」によって、加害者、被害者、裁く者それぞれが複雑に絡み合う物語として語られる。またアティカは両親の世代と違って、自ら選択してフランス語の教師となったとされる。そのフランス語によってアラブ語文学の世界と交わること、その出会いから生まれる、読み変えや批判を含む様々な可能性、さらにそれがもたらす危険（だからこそアティカの語る声は禁じられなければならなかった）をこの短編は提示する。一元化を強いられる言語状況（ただし現実はそのをはなはだしく裏切っているとしても）を、フランス語によっていかに語ることが可能かを考える時、切羽詰まった告発のエクリチュールは、それ自体変貌することを余儀なくされる。

### 3. 緊急性から「文学」へ

90年代アルジェリアの文学を指して「緊急のエクリチュール」という表現が、用いられることがある<sup>41</sup>。書き手が、危機的現実に突き動かされるように

41 たとえばロズリーヌ・バフェは論文のタイトルに用いている。c. f. Roseline Baffet, *ノ*

して短期間で書き、出版した作品という意味で、我々のテキストもたしかに緊急性を帯びている。しかし、「緊急性 (urgence)」とは、結局のところ何を意味しているのだろうか。この用語で語られるエクリチュールのどのような性格を指し示しているのか。

書き手の、緊急に書きたい、或いは書かねばという欲求は、しばしば一人称の語りを選ばせるようである。実際、ベイの対談・エッセイ集およびジェバルのエッセイ集を除いた24作の内、「私」という語り手を持つものが半数を超え（全て女性）、とりわけフィクションというより「証言 (témoignage)」の性格が強いものはほとんどすべて一人称である<sup>42</sup>。このタイプの作品ではそのパラテキストにあたる部分（主に裏表紙の内容・著者紹介）で、語り手と作者の同定が強く示唆される<sup>43</sup>。また、こうしたパラテキストは、テキストの持つ証言としての性格—「私」が「私の経験」を語る—を様々に強調する。たとえば、『アルジェリア 動乱の中の一女性によるクロニク』では『テレマ』誌の書評が引用され、「ファティアはこの恐怖でずたずたにされた日常生活を証言したいと願う」と、すぐその下で紹介される著者の名が語り手の一人称に重ねられる。このタイプの作品で「クロニク（年代記）」という題名が用いられている例が他にも2例あるが、この用語は内容の事実性を保証する役割を担っているように思われる。ただしこの2例には、ファティアと違って日付の記述がない。ハヤット（95年）では「あるアルジェリア人女性のクロニク」という副題がついており、その裏表紙には「これは私たちの時事問題にかかわる作品である」という紹介がみられる。しかし、同じく副題にクロニクをもつアシマ（95年）の場合、裏表紙には「最も深いところにおいて荒廃したアルジェリアの日常生活の容赦ない証言であるこのフェリエル・アシマの本は、政治パンフレットではない、恐怖のフレスコ画なの

42 “Ecriture de l'urgence-Urgence du lien social”, in Bonn et Boualit 1999, pp.41-51.

43 例外としてブースフの『追いつめられて生きる』は三人称。序文で著者は主人公を Nina と名付けて証言させると述べているが、この三人称はきわめて一人称に近い。

44 上記ブースフの裏表紙でも「これは彼女（著者を指す）の物語である」と明言している。

だ。(中略) これはもちろん文学である。本書をして衝撃的なものにして  
いるは、ジャーナリズムには表現できないことを描き出す力なのだ」とある。  
ここでは「文学性」がジャーナリズムや政治的パンフレットに対立させられ  
ている。証言の衝撃力を増す形式が文学だということだろうか。会話文が多  
用され、<sup>44</sup> 必ずしも「私」一人の声が全てを覆っているわけではないアシマの  
エクリチュールは、たしかに、「私」の日常生活と「私」の主観に密着した  
書き方でありながら、すでにフィクションへの一歩を踏み出しているといえ  
る面を持っている。しかし、パラテキストの言う衝撃力も、ここではあくま  
で事実の保証—クロニクという副題—なしにはありえない。一人称の語り  
ではあるが表紙に「小説」と明示されたジナイークディル『声の無き』の裏  
表紙の紹介文は「この小説—真実（すべてのことがらは悲劇的に正確である）  
は」と始まる。ここでも、文学は真実の支えを主張している。ハヤットは序  
言で自作を

「小説？ 自伝的物語？ 証言？ おきまりの恐怖と死者たちの群を伴った、  
いつもと同じような一日のクロニク？ (中略)

どれでもないし、その全てでもある。

(中略)

現実かフィクションか。フィクションか現実か。

どちらでもなく、その両方でもある。<sup>45</sup>

と、同時に証言でも文学でもありうるエクリチュール、と定義する。なお、  
クロニクを標榜する3作は全てタイトルにアルジェリアもしくはアルジェ  
の語を含み、さらに、タイトルまたは副題に「一女性」または「一人のアル  
ジェリア人女性」を含む。ここにも、これらのテキストに共通する基本的性  
格が見て取れるだろう。なお、この3作の他、女子中学生の日記の形式をと

44 クロニク3作のうち、日付のあるファティアにおいて会話文はきわめて少ない。ハヤット  
はアシマ、ファティアの中間である。

45 Hayat, 1995, p.7.

るダキアの『ダキア、アルジェの娘』<sup>46</sup>や前掲のブースフなどは、95年と96年に集中して出版されている。

こうした「証言—文学」の目的をファティアは「決して忘れないために、若い世代がそのことを覚えているように、そして原理主義<sup>47</sup>の犯罪的冒険に誘惑されないために<sup>48</sup>」と述べている。だが、そうした社会的目的のみがこれらのエクリチュールを生み出したとは考えにくい。社会情勢一般やその分析以上に、語り手の女性たちは日々の生活の中で体験する絶え間ない緊張、不安、恐怖を語ろうとする。緊急なのは、脅威にさらされて変貌していく生をいかに生き抜くかという問いかけである。極限的状况にあつて狂気に陥らずに生きのびる方策としてのエクリチュールが、同時に社会批判としても読まれるといった方がよいのかもしれない。ジナイークディルの語り手は「どうやって正気を保てというのか<sup>49</sup>」と悲痛な叫びをあげ、ベイもあるインタビューで、カフカを引用しつつ「書くことは私が生きのびるための闘い<sup>50</sup>」なのだという。94年の末にハイジャック事件に遭遇した体験を、マリカ・リオヌは97年に『不純なものクロニク』<sup>51</sup>として発表するが、それは「私」がこの体験を消化し、その場で物理的にだけでなく、事後、精神的にも乗り越える試みとその成果であると言えるだろう。同じ97年ハマドゥ『永遠の最初の日』は、恋人を暗殺された「私」の喪の作業としてのエクリチュールである。ハヤットの『ユーユーと涙』には、家族を惨殺された登場人物が偶然会った未知の語り手に、詳細にその話をするエピソードがある。それは彼が生き抜くための必然であり、生きのびるために書く行為自体のメタファーでもあるだろう。

しかしこうした「証言」型エクリチュールがすべてなのではない。1作目がこのタイプである著者のうち2人<sup>52</sup>は2作目を出版しているが、内容・形式

46 Dakia, *Dakia, fille d'Alger*, Flammarion, 1996.

47 原文では "le fondamentalisme".

48 Fatiah, op.cit., p.46.

49 Hafsa Zinai-Koudil, *Sans voix*, Plon, 1997, p.92.

50 Bey, "Interview de l'auteur", in ALA, N.5, 1996, p.75.

51 Malika Ryone, *Chronique de l'impure*, ALA, N.7-8, 1997.

52 4人は今のところ、「証言」型の一作のみ。

ともに大きく変貌している。また、この他にも、90年代アルジェリアを書く異なる形式の試みが存在する。

アシマとハヤットはどちらも95年に第一作を出版したのち、前者は96年、後者は98年に第二作を発表する。両者とも第一作は「私」による「緊急」のエクリチュールの性格が強く、また直接的社会批判の言説も多く含んでいる。それに対しアシマの第二作『ルレムもしくは天使の性』<sup>53</sup>の表紙は95年の『アルジェの一人の女』のそれと同じ構成を持ち（同じ出版社）、後者の題名の下には「災厄のクロニク」と印刷されているのだが、それと同じ箇所には『ルレム』では「小説」という文字が見られる。語り手は一人称と三人称が交代、直接の批判は姿を消し、設定年代も現代とはおぼしきものの明示はされない。両性具有の登場人物を中心にその性が欲望、暴力、搾取の対象となるさまを描き、現代アルジェリアの「裏社会」の一端を垣間見させる物語になっている。社会的混乱が直接書き込まれる度合いは低いのだが、押し殺したような不安な雰囲気全体を覆っている。

ハヤットの第二作『ユーユーと涙』<sup>54</sup>は、『ルレム』に比べると「時事問題」により密着しており、語りは前作と同じく一人称である。しかし、「私」の生活の場がパリである点<sup>55</sup>、また現代の物語に過去が導入され、個人の物語とアルジェリアの歴史とが交錯する点で、「今・ここ」に立脚した前作と異なる。母の封印された体験（独立戦争中幼い「私」の目の前でフランス兵に強姦されたこと、及びその時妊娠し後に出産したこと）は私にとっても封印され、消去された記憶だったのだが、その母の死を目前にして、「私」の意識の表面に立ち現れる。そして、母がこっそり他所で産み落としたあの子供はどうなったのか、と「私」は初めて自問する。結局、この話題が母と娘の間で語られることはなく終わるのだが、テキストの最後に、悔い改めたテ

53 Fériel Assia, *Rhoulem ou le sexe des anges*, Arléa, 1996.

54 Nina Hayat, *Les youyous et les larmes*, Editions Tirésias, 1998.

55 パリに住むアルジェリア出身の語り手が死期の迫った母のもとに戻り、その死を看取る。そのアルジェリア滞在中の物語に、アルジェリアの歴史と深く結びついた母や自分の過去の物語とが織り合わされる。

ロリストとして登場し村人に惨殺される人物が、その子ではないかと強く示唆される。「母」と「アルジェリア」の同一化はいくつかのレベルで確認できる。フランス人に犯されるのは母であると同時にアルジェリアそのものであり、生まれた「鬼っ子」は30数年を経て、アルジェリアに災いをもたらすテロリスト（イスラミスト）となる。ここには、現在の危機の根底に悪しき「異物」の影響を見る視線がある。語り手はテロリストを「アルジェリアが孕んだ最も奇妙な外国人」<sup>56</sup>とも呼んでいる。母の病状とアルジェリアの現状との同一化は、同型の表現を繰り返す「私の母は重体、私の国は重体…」<sup>57</sup>という箇所などにも鮮明に現れる。母の死は、母の文化を受け継ぎ、さらにはフランス育ちの自分の子供たちにも受け継がせようという決意へと「私」を導く。「国」に関しては、イスラミストの脅しにも屈せず、大統領選挙<sup>58</sup>の投票所へと大挙して押し寄せる人々の姿が再生への希望を「私」に与える。死と再生を媒介に個人の物語と「国」の歴史とが交錯する形は、楽観論に終わりはしないが、同じ一人称の語り手を、95年のテキストの閉塞から救い出すように働いていると言えるのではないだろうか。

マルアヌ、ヘルビッシュ、モケデム、ベイの作品はいずれも、「証言」型のエクリチュールとは性格を異にしている。

レイラ・マルアヌの二作はともに「小説」と表紙にあり、一人称の語り手はどちらの場合も狂気に陥っていく。96年の『カスバの娘』<sup>59</sup>は、貧しく、母と弟を養う義務を負った女性が、金持ちの男性と結婚しようとして結局はもてあそばされただけに終わる物語で、その男性を殺害する最後の場面は、現実なのか幻覚なのかははっきりしない。98年の『誘拐者』<sup>60</sup>では伝統的家父長である父の家に住む6人の娘の長女が語り手で、父の暴君ぶりをはじめとする物語が進行するが、途中から読者は、語り手が記憶の一部を欠いていることに

56 Hayat, op.cit., p.131.

57 ibid., p.97.

58 明示はされないが1995年11月のゼルーアル大統領が選出された選挙と推測される。

59 Leïla Marouane, *La fille de la Casbah*, Julliard, 1996.

60 Leïla Marouane, *Ravisieur*, Julliard, 1998.

気づく（性的体験に関わる記憶が隠蔽され、一番下の妹とされるのは実は「私」の娘である）。我々は、「私」の語りを、徐々に彼女が幻覚や錯乱に陥っていくプロセスとして読むことになる。『カスバの娘』では、特権階級の腐敗がむき出しにされ、『誘拐者』では絶対権力者たる父の虚像がはぎ取られる。これらはすでに、アルジェリア文学にはおなじみの主題だが、両作品ともイスラミストの登場人物をもつ。前者では、医師として新しい女性の生き方を実践していた語り手のところが、最後には黒いヴェールと手袋に覆われた不吉な姿で、救いを求める語り手の前に立ち現れる。後者では、当初、「私」の弟とその妻がイスラミストであるが後に姿を消し、最後に完全にヨーロッパ化された姿で再び現れ語り手たちを救おうと国外脱出させる。女が狂気に陥るこの2つの物語は、次第に「狂気」にとりつかれていく社会のメタファーと読むことも可能だろう。マルアヌの語りは随所にユーモアが感じられ、現実感覚にあふれたところから出発するだけになおさら、徐々に崩壊していく内的世界が外的世界ともはや見分けのつかなくなる過程からは、落差の大きさが読みとれる仕掛けになっている。「証言」型のエクリチュールは緊張や閉塞感に満ちているとはいえ、「私」が狂気と闘う方法でもあり、出版された成果は、その闘いに対する一定の勝利をも意味している。これらのエクリチュールにおいて、「私」は最終的に、マルアヌの語り手の運命はまぬがれるのである。フィクションが可能にする「語り手」の崩壊は、「証言する私」のエクリチュールが不可能になる地点を暗示しているのかもしれない。

ヘルビッシュの2作はいずれも時事問題と直結はしているのだが、三人称の語りを持ち、中心的登場人物はどちらにおいても殺される。出版は『曇った眼』（95年）の方が先であるが、執筆は『ナウエルとレイラ』<sup>61</sup>（97年）の方が早い。『曇った眼』は「証言」型の内容も持つのだが夫のみならず視点人物である妻も最後には凶弾に倒れる。また、神話的「泣き女」という主題が

61 Sabrina Kherbiche, *Nawel et Leila*, Présence Africaine, 1997.

導入され、夫が倒れたあとの妻の苦悩に満ちた喪の作業、そして「加害者」側との人間関係が中心的テーマとなる。加害者側を描くにはフィクションの方がふさわしいのかもしれない。とりわけ、90年代危機の、「身近なテロリスト」による暴力（たとえば「近所の若者」による暗殺が少なくない）が、死をもたらすだけでなく、テロ行為にまきこまれた人々の関係を引き裂き、腐食させるという特質、この最も「証言」されにくい側面を表出させる方法として、文学のエクリチュールがあるだろう。<sup>62</sup>

マリカ・モケデムは90年に第一作『歩く人々』<sup>63</sup>、92年に『いなごの世紀』<sup>64</sup>をすでに発表しており、また70年代前半からフランスに住んでいる点で、本論で取り上げる著者の大半とは異なる。この2作が、90年代の状況とは直接関わらないのに対し、93年の『禁じられた女』<sup>65</sup>はアルジェリア南部の砂漠地帯の小さな町にまで押し寄せるイスラミズムが物語の核心部分にもからんでくる最初期のテキストとすることができる。（本論の作品中最も早い出版物である。）この作品では中心人物の女性は、モンペリエ在住で一時的に故郷に戻っており、続く『夢と暗殺者』では逆に前半はオラン、後半は亡命先のモンペリエが舞台となる。イスラミストによる脅迫やフランスでのアルジェリア支援の運動など、時事性には欠けていないが、物語の主眼は「私」による母の探求にある。この二作が一人称の語りであるのに対し、98年の『亀裂の夜』<sup>66</sup>は三人称小説であり、<sup>67</sup>中心人物の女性は最後に病死する。<sup>68</sup>ヘルビッシュ

62 『曇った眼』はそればかりでなく、女をめぐる様々なテーマ群をも含んでいるが（母／娘、子を産む女／生まない（生めない）女、男によって初めて存在意義を認められる存在としての女）、先行する『ナウェルとレイラ』では「女」のテーマが中心である。妹に対して抑圧的、独占的な「母」の力を行使し、最後には自己解放しようとする妹を殺害する姉の物語はいささか誇張がすぎて説得力に欠ける。姉に鬱状態を、妹に自己解放の試みをもたらすのは、二人のバリ亡命だが、その原因としてアルジェリア危機は国に残った父との電話を通して語られるのみで、物語との積極的関わりは薄い。

63 Malika Mokeddem, *Les hommes qui marchent*, Ramsay, 1990.

64 Malika Mokeddem, *Les siècle des Sauterelles*, Ramsay, 1992.

65 Malika Mokeddem, *L'interdite*, Grasset, 1993.

66 Malika Mokeddem, *La nuit de la lézarde*, Grasset, 1998.

67 いずれにおいても表紙に「小説」とある。

68 殺害によるものではないが、死因の一端は、危機による薬品不足や医療制度の荒廃にあるとも読める。砂の侵食にさらされるアルジェリア南部の要塞都市から住民たちがふもとの村に逃げ出し、マージナルな位置にあるよそ者の女性と、やはり周縁的な位置にいる盲目の男性のメ

の場合もそうだが、三人称の語りは主人公の死を可能にするために存在するかのようである。実際のところ、本論の、インタビュー等を除く24作中三人称の語りを持つものは10作だが（内、一人称の語りと共存している例が2、短編集2）そのうち、主要登場人物が「生きのびる」のは実に、著者の一人称にきわめて近いブースフの例を除くとジャバリの『赤い粘土』一作のみである。<sup>69</sup>短編集でもジェバルの『オラン、死んだ言葉』は一編を除いて一人称であり、唯一の三人称が上でとりあげた「バラバラにされた女」なのである。またもう一編は、内に三人称の部分を含むが、そこでは中心人物は殺される。両人称が交代する『ルレムあるいは天使の性』では三人称の物語の中心人物、両性具有のルレムは殺害される。我々のテキストでは、自ら語れない主要登場人物は生きのびるすべを持たない。あるいは、見方を変えれば、これら三人称の語りは、自ら語れなかった者にその運命を語らせる試みでもある。これら死に至る三人称は、マルアヌの崩壊する「私」、生きのび「証言」する「私」と共に、危機のエクリチュールを形成しているのである。

女性の問題を中心にすえた『始めに海があった』（96年）に対し、98年の『アルジェリアの短編』（この題名は『アルジェリアからの便り』という意味にもなる。）でマイサ・ベイは、短編集という形式を、90年代危機を様々な視点から多角的にとらえるために活用しようとする。裏表紙には著者自身が「語に発言権を与える緊急の必要に迫られて書かれたテキスト」とうたっているが、同じ「緊急性」といっても95年、96年に多い証言型のものとはかなり異なる。「私」の語りによる緊急のエクリチュールがしばしば「犠牲者」の視点に重なるのに対し、ベイの方法は危機の複雑さ、被害者、加害者ある

---

ゝ二人だけが残る。都市部からはるかに隔たった砂漠の町にも、北部の危機は無関係ではない。女の恋人は、テロに見舞われた北部の親戚を訪ねてまだ戻らない。見捨てられた要塞をアルジェリアにみわたるのは容易であるが、直接危機を物語るのではなく、むしろ『いなごの世紀』などにみられた、神話的なものの影がちらつく。『禁じられた女』と『夢と暗殺者』はフィクションであるが、語り手に、南部出身でフランス在住の医師である著者に重なる部分が一部とはいえあるのに対し、『亀裂の夜』は舞台（砂漠のへの町）以外自伝的要素は認めにくい。

69 この作品が祖母の伝える知恵による癒しを語っていることと、主人公の救済とは無関係ではない。しかし、この作品においても、もう一人の祖母ともいえる医師一助産婦一庭師の女性は惨殺される。

いは共犯者のそれぞれが単純にレッテルを貼って分類できる存在ではないこと、敵／味方の境界線の危うさを描くにふさわしい。たとえば犠牲者といっても、ここでは、追いつめられる「私」の、いやが上にも鋭敏な感覚のとらえるそれではなく、自分の周りで何が起こったのか（父の死）理解できずにいる幼い少女であり、脅迫を受けた夫に従って逃げるのを拒否し、夫の死後、罪悪感に苦しむ妻であり、いつものように退屈することのない一日の終わりに路上で一瞬のうちに吹き飛ばされる失業中の若者である。また意味上も形式上も破綻をきたしたモノローグからなる一編は、愛する人をテロに奪われた女の錯乱を語っている。この形式は、マルアヌの一人称とはまた違ったかたちで、語ることの不可能なことがらを言葉にしようとする苦闘を、その傷痕を示してみせる。<sup>70</sup>テロについて社交的会話を交わすエリート層とおぼしき人々の「傍観者」ぶりを、そのグループに属しつつそれに耐えられない一人の女性を通じて描く一編は、他の作品がとりあげていない側面を垣間見せて興味深い。加害者側の視点に立つものも2編ある。一つでは、「男らしさ」の規範の重圧が心優しい若者をテロに駆り立てたのではないかという仮説が語られ、もう一編では、自らの殺人という行為の宗教的正当性を必死で自分に信じさせようとする人物に一体化した語りがある。その「無理」を露呈させる。残る3編は直接90年代危機を表現するものではない点で共通している。女性のモノローグで成立する「仲人」は、「今度は私が話す番ですよ」<sup>71</sup>という象徴的一文で始まる。語りの権力を得たことを宣言する女の言葉が、家父長制社会の男の利己的欲望を暴いていくのだが、その間、普段は言葉や権力を独占している男は言葉を奪われた状態にあり、テキスト中一度も発言しない。続く一編はもう一人の「錯乱」する女を中心とし、彼女は最後に夫を殺害する。そして、圧政と暴力に苦しむ町を、女たちのストライキが救う、寓話ともいべき一編が短編集をしめくくっている。この寓話がユートピア的希

70 各編の最初には題名が印刷されていないのだが、巻末の目次にはタイトルが並べられており、この一編は「言語にならない体」と名付けられている。

71 Bay, *Nouvelles d'Algérie*, Grasset, 1998, p.129.

望を付け加えている分、かえってその希望を必要とする状況が際だつ。90年代危機の諸相は、ここで、総体的に把握されるというより、必ずしもかみ合うことのない断片として様々な物語を生み出す。それは同時に、アルジェリア社会をややもすると一面的にとらえようとする見方（たとえばフランスのマスコミのそれ）に対する異議申し立てともなっている。

作家として長い経験を持ち、すでに高い評価を得ている点でジェバルは他の90年代の著者たちとは一線を画している。95年から97年にかけての3作は、それぞれがきわめて異なった様相を呈する作品であり、個別に検討を必要とする。ここでは個々の詳しい分析には入らず、90年代の女性によるテキストの全体像をとらえようとする目的にそっていくつかの点を指摘するにとどめたい。97年の『オラン、死んだ言葉』は、上述の「バラバラにされた女」を含む短編集だが、ベイのそれとは異なり、直接90年代に関わるのは一部であり、そこでは上でもみたように想像的なものの力が駆使される。また、本論のテキスト全体について言えることだが、危機を書く女たちのエクリチュールは、そのほとんどにおいて、同時に愛を語っている。とりわけジェバルは、この主題を離れることのない作家であり、この短編集においても、90年代に限らず広い意味でのアルジェリア社会の危機を、様々な愛の形を通して描こうとしているようにも見受けられる。「バラバラにされた女」も、何よりも、一つの悲劇的な愛の物語なのである。なお、この短編集は第一部が基本的にアルジェリアを舞台にしているのに対し、第二部は「フランスとアルジェリアの間で」と題され、2つの国や社会の接触に関わる内容を持つ。

同じく97年の長編『ストラスブールの夜』<sup>72</sup>は『オラン、死んだ言葉』のみならず、本論のどの作品とも異なり、アルジェリアは一度も物語の舞台にならない。中心人物はアルジェリア人だが、冒頭にパリがわずかに現れるのみで、舞台はタイトルにもあるようにストラスブール、すべてはアルジェリアからはるかに遠いアルザスの都市で進行する。独仏の国境に位置し、現在で

72 Assia Djebar, *Les nuits de Strasbourg*, Actes Sud, 1997.

はヨーロッパ統合の象徴的都市の一つであるこの町は、古来、複数の文化、言語、民族の交錯し、対立し、共存する地点であった。あえてそのような場が選ばれたことは、同じく複数の言語、文化、民族からなるアルジェリア、現在、多様性よりは一元化への圧力が高まるアルジェリアへの批判的視線の存在を窺わせる。もちろん、この奇妙な恋愛物語は様々なレベルで読みが可能であり、単純な比較文化論とは無縁である。遠いのは地理的距離ばかりではない。時間的にも、主要な物語は現代に設定されているとはいえ、語りを生み出すイメージの核を成すのは第二次大戦中、ドイツ軍が迫る中、住民が逃げ出してゴースタウンとなったストラスブルである。また、主人公の研究対象は、12世紀にこの都市に実在した、修道院長にしてラテン語作家、作曲家でもある女性なのだ。また、50年代からこの地方で働いていたマグレブ移民労働者の足跡も、現代の移民とその子供世代と同じく、重要な要素としてこの小説を構成している。フランス語表現アルジェリア文学がフランスとの関係を書くときしばしば、「閉鎖的」二者間関係になりがちなのに対し、フランス自体を多元化するアルザスを持ち込むことで、その関係にも微妙な変化をもたらされる。アルジェリアの前に立ちほだかり、対峙を迫る者ではなく、それ自身が様々な他者と向き合い、内にも多様性をかかえた存在として提示し直されるのである。危機がアルジェリアを自閉状態に追い込む危険を生んでいる時、ジェバルの取った「遠くの物語」という戦略は、閉じた回路を開く一つの有効な手だてになり得るのではないだろうか。

「最近の記憶の要請に答えて」<sup>73</sup>書かれた【アルジェリアの白】(95年)は死の列伝、死からみたアルジェリア文学史であり、また隠蔽や歴史の偽造という観点から見たアルジェリア現代史でもある。<sup>74</sup>語り手はこのテキストを「レシ(物語)」と定義するところから始めているが、この「私」はジェバー

73 Djebar, *Le blanc de l'Algérie*, p.11.

74 特に後者の点、およびタイトルにある「白」の様々なコノテーションについては、石田靖夫氏による書評にくわしい。石田靖夫「書評 Assia Djebar: *Le blanc de l'Algérie*」,【仏文研究】、第、199年、京都大学仏文研究会, pp.265-268.

ルの他の作品と比べても、最も作家自身に近い。印刷上の形式から見ても、各断章に番号が振られる形は、エッセイと講演集である『私を取り囲むこの声たち』<sup>75</sup>を除いて見られない。しかし、エッセイとして、あるいは「客観的」歴史記述として単一のエクリチュールが選ばれているのではない。暗殺された3人の友人との死後の会話（第一部）は「私」に訪れるものとして「私」のエクリチュールを始動させる。この第一部は、死者の承認と協力を得て彼らの死、さらにはアルジェリアを覆う人々の死、記憶の死を書く意志の表明であるとも読めるだろう。そこには、この会話がフランス語でなされたこと、3人と「私」との使用言語についての言及もあり、このレシ自体がフランス語で書かれることに対する説明にもなっている。こうした第一段階の次に、3人の死の瞬間がそれぞれ語られる。会話を含めた三人称の語りで一見フィクションの一節のような部分もあるが、語り手が事後に与えられた様々な情報と想像力をもって書いたという事実<sup>77</sup>を、読者が読み間違えることはない。

この多形の語りは、友人の死のみならず、アルジェリアのフランス語作家たちの死を、さらには肅清され闇に葬られた人々の死をエクリチュールの場に呼び出す。これらの人々がどのような死を死に、それがどのように語られてきたのか、もしくは語られてこなかったのかが、第三部の問いになる。作家の選択は、アルジェリアに生き、フランス語で書いたということが基準であると思われ、カミュ、ファノン、セナック、アンナ・グレキなどが含まれている。それぞれの作家がどのように死んだかというこの列伝を読むと、あらためて、暴力や事故によるもの、若くしての病死など「未完の死」（第三部のタイトル）の多さに驚かされる。作家たちの死の列伝は、独立戦争中の権力闘争による革命指導者の一人アバヌ・ラムダヌの暗殺、フランス軍の情

75 Assia Djebar, *Ces voix qui m'assiègent*, Albin Michel, 1999.

76 マフド・ブセブシ（精神科医）、ムハメド・ブホフザ（社会学者）、アブデルカデル・アルラ（劇作家）の3人。実在の人物であり、ここで語られているように1993年3月から6月にかけてテロに倒れた。なお、『アルジェリアの白』はこの3人の思い出に捧げられている。

77 ただしアルラは危篤状態でバリーに運ばれ、息をひきとったのはバリーであるため、バリー在住の「私」は遺体に対面している。

報攪乱戦略に端を発したアミルーシュ（解放軍の司令官の一人）の、同志たちに対する肅清、独立後に起こったラムダヌの殺害者クリム・ベルカセン（同じく指導者の一人）のブメディエン（第二代アルジェリア大統領）による暗殺など、現代アルジェリアにおいてタブー、「記憶喪失の象徴<sup>78</sup>」となったもう一つの死の列伝と交代しつつ、その先にはもちろん90年代の「死」が見据えられている。「崇高な英雄と兄弟殺しとが区別されることなく混じり合ってきた過去<sup>79</sup>」を不問に付したまま、加害者が犠牲者の墓前で行う賞賛の演説（ラムダヌの移葬の際のエピソード）などが有効である限り、「生きたアルジェリア文化の中心におかれるべきだった唯一の問いははっきりあいた穴、死んだ眼であり続けるだろう<sup>80</sup>」。だが、ジェバルの主眼は単純な犯人探しや断罪にあるのではない。未完の死を死ななければならなかった人々のそれぞれに、できる限り寄り添うエクリチュールを生み出すことこそが問題なのだ。作家の仕事は、隠蔽された事実を暴くこと以上に、語ることを禁じられてきたことを語り出す方法を探求することにある。『アルジェリアの白』の形式上の複雑さもここに起因している。そしてその過程は、「私」自身を巻き込まずにはいない。「この葬列をたどりながら私は何を探しているのだろうか<sup>81</sup>」と自問する語り手は、「自分も向こう側に行ってしまいたい、彼らに合流したい<sup>82</sup>」という欲望に直面する。また、第四部には次のような一節もある。

なぜ私は、アルジェリアの地で、まさにこの95年という年に、死—黒い純血種の馬—とエクリチュールの接合にこれほどとりつかれているのか<sup>83</sup>。

「接合 (accouplement)」は動物の交接をも意味する。また、ジェバルは、

---

78 *ibid.*, p.151.

79 *ibid.*, p.150.

80 *ibid.*, pp.150-151.

81 Djébar, *Le blanc de l'Algérie*, p.162.

82 *ibid.*

83 *ibid.*, p.261.

別の作品で、1830年のフランス軍による最初のアルジェリア遠征をも類語 (copulation) を用いて「みだらな交接<sup>84</sup>」にたとえている。この告発の書は—これはまちがいになく告発の書でもある—、忘却に抗し受け入れがたい暴力に否をいうエクリチュールが、書く者を死の魅惑に引き込んでいく様を露わにするテキストでもあるのだ。ジェバルのエクリチュールは、他の作品のほとんどにおいてそうであるように、死との抱擁ともいうべき『アルジェリアの白』においても、きわめてエロスのことをやめない。

凝縮された内容を持つ短い第四部は、このテキスト自体について、さらにはアルジェリアを書くことそのものについての、「私」の総括的な問いかけである。植民地主義の暴力から自らを解放したはずのアルジェリアが、今度は自身にむけられた暴力に苦しむ。死の、忘却の、あるいは希望の「白」を見据えて、その「自身」とは何かを問う困難な作業が、「エクリチュールを持たない苦悩のアルジェリア、今のところ、ああ、血のエクリチュールのアルジェリア<sup>85</sup>」に必要なのではないかと。そして、ジェバルは彼女独自のエクリチュールを「夢みる」ことによって、死者たちの喪に服すためにも欠かすことのできないこの仕事を果たそうとする。

そう、他のこれほど多くの人たちがアルジェリアを語っている、熱意を、あるいは怒りをこめて。私はといえば、私の、消え去った人々に話しかけ、彼らにはげまされて、アルジェリアを夢みる。<sup>86</sup>

#### 4. テキストの向かうところ

冒頭で述べたように、本論で検討した全てのテキストはフランス語で書かれ、フランスで出版されている。アルジェリア出身者が決して少なくないと

84 Djebar, *L'amour, la fantasia*, Jean-Claude Lattès, 1985, p.

85 Djebar, *Le blanc de l'Algérie*, p.275. なおここでは《sans écriture (エクリチュールなしの)》と《sang-écriture (血—エクリチュール)》とに言葉遊びが見られる (sans と sang は同音)。

86 *ibid.*, p.261.

しても、主たる読者がフランス人であるフランスの出版市場に送り出されたものである。私は、読者層についての調査を行ったわけではなく、厳密に、これらのテキストが何人位のどういう読者に読まれているのか論じることはできない。しかし、いくつかの点について考察を試みることは不可能ではないだろう。フランスの読者にとってこれらのテキストがどのようなものとして機能するのか。また、アルジェリアの読者にとってはどうか。さらには、そのどちらでもない私自身の立場はどこにあるのか。

95年に出版されたハリダ・メサウディの対談<sup>87</sup>は大成をおさめ、翌年にはただちに文庫化されている。著者のテレビ出演の果たした役割が大きいとはいえ、ともかく、アルジェリア女性の発信するメッセージがフランスの読者層の注目をひいたことだけは確かである。これに限らず、アルジェリア関連の出版物が多くの人々に受け入れられたという事実は、それが読者の期待に沿うものであったことをも意味してはいないだろうか。野次馬根性や、恐いもの見たさという、比較的単純な「期待」との合致に加え、こうした「困難な状況を内側から暴露する」かに思われる出版物は、著者の意図とは別に、フランスですでにかなり一般化しているアルジェリアに対するマイナスイメージに合致し、さらにそれを強化するよう働く可能性を持っていることは否定できない。たとえば、イスラミストの暴力は、それが批判的に記述されていても、イスラムが必然的に狂信や暴力を生み出す宗教であるかのごとき誤解を招く危険と無縁ではない。特に女性をめぐるでは、上に見てきたように、直接の暴行や殺人のみならず（犠牲者が女であることで「残虐性」はより強調される）、アルジェリア社会の持つ抑圧的な面が批判されることが多いが、これは、フランスの読者にとって、進んだフランスまたはヨーロッパに対して遅れたアルジェリアまたはイスラム文化圏という図式を強化する、受け入れやすい言説でもある。ダキアの『ダキア アルジェの少女』は、青少年向

---

87 Khalida Messaoudi, *Une Algérienne debout. Entretien avec Elisabeth Schemla*, Flammarion, 1996.

けの出版物で、他のテキストに見られる暴力の背景の複雑さへの言及や分析などが無い分、単純な「イスラミスト・イコール・絶対悪」のメッセージを発してしまっている面がある。また、アルジェリア人女性ジャーナリストバヤ・ガセミの署名のある聞き書き『私はナディア、ある GIA 指導者の妻』<sup>88</sup>は、イスラミストの武装組織 GIA の末端指導者と結婚した若い女性が語った体験談である。全編フランス語で、この女性自身が実際には何語で語ったのかについては言及が無い。本論の著者たちは基本的に都市部の中産インテリ層に属する人々であり、この聞き書きは、彼女たちの描く都市生活とはかなり異なる貧しい農村の厳しい現実を垣間見させる。「イスラミスト」闘士の生活習慣など生活の細部を伝え、実体がよくわからないまま「悪魔化」されている感のある GIA にある種の具体性、人間的側面を与える効果はあるかもしれない。しかし、同時にそれは、女性へのきわめて抑圧的内容なども含んでおり、いっそうの「悪魔化」をすすめかねないのである。

さらに、本論の対象となったテキストに共通する、アルジェリア文化の複数性の称揚もまた、見方によってはフランスの「自尊心」をくすぐる。著者たちがフランスにおもねようとして、フランス、とりわけフランス語を、アルジェリア文化の不可欠の要素の一つであると述べるわけでは決していない。しかし、植民地支配を糾弾される側にとって、こうした言説がいかに心地よいものとして機能するかは、昨今の日本における「自由主義史観」論争をみても想像に難くない。130年に渡る過酷な支配と搾取も、今となってはアルジェリア文化を豊かにする歴史の一部、古代から代わる代わるこの地にやってきては支配した様々な民族・勢力の一つにすぎないと、フランスの責任を相対化する絶好の隠れ蓑を提供してしまう恐れは否定しきれない。

アルジェリアでどの程度これらフランス語テキストが読まれているかについても正確なところはわからない。人口の三分の一がフランスのテレビ番

---

88 Baya Gacemi, *Moi, Nadia, femme d'un émir du GIA*, Seuil, 1998.

組を衛星放送で見ているといわれ、古典アラブ語出版メディアよりはフランス語のそれの方が出版部数は多いとはいえ<sup>89</sup>、フランス語文学テキストが広範に読まれているとは考えにくい。現代アルジェリア女性の直面する問題について語るこれらのテキストが、むしろ「外」で読まれているというのが現実だろう。ジェバールはこれまでも繰り返し、女の「表現」を喜ばない社会にあってフランス語で書くことは、「検閲」をかいくぐる方策の一つであると述べている。ただ、この戦略には、そうして書かれたものがアルジェリア女性の「共有財産」となりにくいという問題がある。90年代のテキストについても同じことが言えるだろう。ただ、今、アルジェリアは、これまで以上に外「へ」開かれた回路を必要としているのではないだろうか（フランス放送の受信は国家の規制を無効にするとはいえ、一方向での「開放」である）。現代のアルジェリア女性の言葉が、たとえ一部の女性のそれであれ（そもそもアルジェリア女性全体を代表することなど誰にもできはしない）伝わることで、「外」からの一方的決めつけを拒否し、別の見方を提出することが可能になるだろう。彼女たちは、抑圧され、しかもその伝統を自らかたくなに維持しようとする女、「外」からの援助を必要とする犠牲者、ではない。自らの問題に直面する力を持ち、それを語るエクリチュールを新たに生み出しつつある。私自身を含め、読者が受け取るのは、そうした実践なのである。アルジェリア人でもなくフランスを母語ともしていない読者であっても、その点は変わらない。ただ、日本社会の読者という条件が働く場面が全くないわけではない（しかし、私はもちろん日本人読者の代表などではない）。たとえば、マグレブの男性中心社会のありかたには、フランスよりもむしろ日本の社会に共通するものがある。母の権力や、男女の文化的・社会的棲み分けについても同様である。一部のテキストにみられる「和魂洋才」論<sup>90</sup>は私た

89 Mohamed Benrabah, *Langue et pouvoir en Algérie*, Séguier, 1999, pp.269-270.

90 たとえばファティアはアルジェリア人であるという出自とヨーロッパ型教育を受けたことの重なりに重要性を見、幸福な子供時代を「ユーロ・オリエンタルなお姫様になって遊んだものだ」とノスタルジックに回想したりもする。c.f. Fatiah, op.cit., p.7, p.10.

ちにはなじみ深い。これらの視点から女性の書き手による文学のみならず、男性の書き手によるそれをも再読する必要があるだろう。また、日本は、植民地支配という点ではむしろフランスと共通する経験を持っている。その記憶とまともに向き合うことすらできないままに。ジュバルの問題提起は決して我々と無縁ではない。そしてなによりも、自らの内に様々な言語や文化の存在することを認めたがらない国の読者に、「他者」の言語の可能性を再考する機会を、これらのテキストは与えてくれるだろう。90年代危機を生きのびようとするアルジェリア女性たちのエクリチュールの実践は、たしかに、私たちにも向けられている。

#### 使用テキスト

ASSIMA Fériel

*Une femme à Alger, chronique du désastre*, Arléa, 1995.

*Rhoulem ou le sexe des anges*, Arléa, 1996.

BEN MANSOUR Latifa

*La prière de la peur*, Editions de la différence, 1997.

BEY Maïssa

*Au commencement était la mer*, ALA No.5, 1996.

*Nouvelles d'Algérie*, Grasset, 1998.

*A contre-silence*, Parole d'aube, 1998.

BOUSSOUF Malika

*Vivre traquée*, Calmann Lévy, 1995

DAKIA

*Dakia, fille d'Alger*, Flammarion, 1996.

DJABALI Hawa

*Glaise rouge*, ALA No.26., 1998.

DJEBAR Assia

*Le blanc de l'Algérie*, Albin Michel, 1995.

*Oran, langue morte*, Actes Sud, 1997.

*Les nuits de Strasbourg*, Actes Sud, 1997.

*Ces voix qui m'assiègent*, Albin Michel, 1999.

FATIAH

*Algérie, chronique d'une femme*, Editions de l'aube, 1996.

HAMMADOU Ghania

*Le premier jour de l'éternité*, ALA No.12-13, 1997.

HAYAT Nina

*La nuit tombe sur Alger la blanche, Chronique d'une Algérienne*,  
Editions Tirésias, 1995.

*Des youyous et des larmes*, Editions Tirésias, 1998.

KHERBICHE Sabrina

*Les yeux ternes*, L'Harmattan, 1995.

*Nawal et Leila*, Présence africaine, 1997.

MAROUANE Leïla

*La fille de la casbah*, Julliard, 1996.

*Ravisieur*, Julliard, 1998.

MOKEDDEM Malika

*L'interdite*, Grasset, 1993.

*Des rêves et des assassins*, Grasset, 1997.

*La nuit de la lézarde*, Grasset, 1998.

RYONE Malika

*Chronique de l'impure*, ALA No.7-8, 1997.

ZINAÏ-KOUDIL Hafsa

*Sans voix*, Plon, 1997.

\* ALA

*Algérie Littérature/Action* (Paris, Editions Marsa)

対談・口述筆記など

GACEMI Baya

*Moi, Nadia, femme d'un émir du GIA*, Seuil, 1998.

HANOUEANE Louisa

*Une autre voix pour Algérie. Entretiens avec Ghania Mouffok*, La  
découverte, 1996.

MESSAOUDI Khalida

*Une Algérienne debout. Entretiens avec Elisabeth Schemla*,  
Flammarion, 1996.